

[実践報告]

ホスピタルアートの普及を目指して —徳島の医療・福祉施設における マスキングテープアートの広がり—

田中 佳(徳島大学大学院社会産業理工学研究部・准教授)

永廣 信治(医療法人修誠会理事長、徳島大学名誉教授)

抄録

本稿では2019年度以降に徳島県内で行った、マスキングテープを用いたホスピタルアート制作活動および普及のためのワークショップ活動の実態について報告する。

新規の制作では、昨年度からのメンバーの入れ替わりに伴い、初心者の制作のハードルを下げるために、使用するマスキングテープの事前の分類やマニュアルの共有、経験者による全体像の制作といった工夫を見出した。

こうした工夫は、新規にマスキングテープによるホスピタルアートを導入する現場では、職員や患者さんの心理的不安を払拭し、制作過程を楽しみにしてもらうために有用な方法でもあった。

また今年度は現場や外部にアート制作の担い手を育成するために複数の場所でワークショップ活動も行った。そこで制作方法を伝え、コラボレーション作品を作る際にも上記の工夫が有益だった。これが功を奏し、複数の現場で積極的にアート制作を行う職員が出現している。今後もこうした普及活動を継続していきたい。

Key word

ホスピタルアート、マスキングテープ、ワークショップ

1.はじめに

筆者は2018年度に徳島大学病院内の文化活動に携わる中で、マスキングテープを用いた階段アートの制作を行った[田中, 2020; TANAKA, NAGAHIRO, BANDO, 2020-1]。同院の階段アートは事情により2019年3月に終了となった。同年7月に作品はすべて撤去され、現在は一部の廊下の通行サインを除き元通りの白い壁に戻されている。しかしその後、この階段アートを見ていた徳島県内の他の医療機関等から声がかかり、複数の施設でマスキングテープアートの制作を行うことになった。他施設での展開にあたっては各現場の状況に応じた工夫が必要となり、結果として制作方法はより効率的になり、広く応用可能なものとなりつつある。

本稿では、2019年7月以降2020年8月までのこれらの医療機関等での取り組みについて報告を行う¹⁾。加えてこの間に複数回行ったマスキングテープアート普及のための活動と効果についても紹介し、ホスピタルアート活動を広げていくための方法を検討する一助としたい。

2. 徳島市民病院階段アートプロジェクト

制作の経緯と方法

徳島大学病院での制作後、最初に声をかけられたのは徳島市民病院であり、院長自ら大学病院の階段アートを見て効果を確認された上での導入依頼であった。同院は院内各所に絵や写真を飾っており、毎年、職員による本格的なバルーンアートの制作やロビーコンサートの開催、外壁へのLEDアートの設置などの文化活動に力を入れており、新規のアートの導入にも前向きであった。

導入場所は、受付のある1階から診察室が並ぶ2階へとつながる部分の階段壁面であった。大学病院と同じく階段室として囲われたスペースで、少し暗めであった。壁面は階段の外側のみにあり、その壁面側にも手すりが設置されている。大学病院よりも幅が狭い上に長いため、段に沿った斜めの壁面は作業に困難をきたすと考えられ、当面は踊り場の壁面の装飾に留めることにした。

大学病院の時と同じように学生がデザイン画を描き、それを見ながらマスキングテープを直接壁に貼っていく。メンバーの交代があり、初めて制作を行う学生がいたため、初心者にも取り組みやすい制作方法を工夫する必要があった。たとえば、モチーフ毎に使用する色柄のテープをあらかじめ決めてケースに入れ、何を使って作ればよいかを分かりやすくしておいた。またモチーフを作る際に、経験者が輪郭部などの外形を作って大きさを決め、初心者はそれを真似て内側を埋めていけば良いようにした(図1)。さらにモチーフ毎に作成例をまとめてグループLINEで共有したり、手順を言語化したものを加えたマニュアルも作成した。その結果、制作は非常に速く進み、2か月ほどで予定部分の制作が終わった。



図1 制作上の工夫。経験者が全体の大きさを決めて外側から大体の形を作っていく、初心者は真似をしながら間を埋めていった。

作業は外来患者がほぼいなくなる午後遅くから始めた。この時間には職員さんが頻繁に往来し、挨拶だけでなく、「すごくきれい」、「また進みましたね」、「いつもありがとう」など多くの声をかけて下さった。毎回午後5時半頃には退勤ラッシュで、こちらも驚くほどの歓声と共に通っていかれ、喜んでもらえているという実感を持つことができた²⁾。このように市民病院では、職員の方との活発なコミュニケーションが生まれた³⁾。

職員向けワークショップ

こうした明るい雰囲気を生かして、いずれ職員の方にも制作してもらうことを期待して、階段アートが一通り完成した時点で職員ワークショップの開催を依頼した。初めての方に階段の現場で作業してもらうのは厳しいと思われたため、当初は別室での実施を検討していた。ところが職員さんたちが階段での作業を強く希望され、最終的には閉院後に階段で開催することになった。すでに踊り場などの安定した壁面は我々の作品で埋まっていたため、作業が困難と避けていた側面を使うことになった。参加予定人数は十名程度と聞いていたが、当日になってみると実に三十数名の参加者があり、職種も医師、看護師、技師、事務など多岐にわたり、大いに驚かされた。道具やマニュアルを準備していた学生も混乱し、急遽、制作するモチーフやその数、場所を変更することになったが、ワークショップは非常に盛り上がった。

このワークショップで、上記の初心者向けの工夫が生きた。この時には各人の一つずつモチーフを作ってもらう方法を採用したため、まず手本となる作例をフィルムシートに作っておいて壁面に貼り、それを真似してもらった。各モチーフに使いそうなテープも分類しておいた。そのうちに手本をどんどんアレンジして、楽しくおしゃべりしながら積極的にモチーフを作っていけるようになり、1時間ほどの作業であつという間に3面の側面が埋まった。後日、全体のバランスを整え、我々と職員さんの見事なコラボレーション作品として階段アートが完成した(図2)。



図2 徳島市民病院の階段アート(部分)。踊り場の部分は学生作。これに続けて段側面の壁に職員さんが制作し、コラボレーション作品となった。

緩和ケア病棟への広がり

その後12月には、緩和ケア病棟からクリスマス飾りを行いたいと声をかけられた。制作場所はエレベータを降りてすぐ前面にある壁であった。それほど大きな壁面ではなく、各種のサインもあったため、当初はクリスマスツリーと雪だるまのみを制作する計画であった。当日は看護師さん8名が待機しており、最初に筆者と学生1名がツリーと雪だるまの大きさを決めて目安を付け、あとは看護師さんたちが見事な連携プレーで次々にテープを貼っていかれた。参考作例として、後述の別の施設での装飾の写真を見せたところ、そこに写っていた他のモチーフにも興味を示され、クリスマスリースや雪の結晶、プレゼントなど、すすんで壁に作っていかれた(図3)。2時間弱で非常に華やかな壁面となった。



図3 徳島市民病院緩和ケア病棟のクリスマス装飾制作

看護師さんたちはすでに患者さんや家族と一緒にクリスマスカードを制作し、そこにマスキングテープを活用していた。このカードにはクリスマス会で撮影した写真をつけて、患者さんにプレゼントするということだった。

年が明けると、クリスマス仕様の壁面が看護師さんたちのリメイクにより正月仕様となり、3月には桜を中心とした春の場面に変更された。マスキングテープのきれいに剥がれるという特徴を活かせば、同じ壁面でも季節毎に装飾を変更することが可能となる。その他の機会にも、患者さんや家族との制作作業にマスキングテープを利用したという報告があった。このように徳島市民病院では、職員向けのワークショップを機に院内の複数の部署で活用されるまでにマスキングテープアートが定着した。

3. 医療法人修誠会での取り組み

徳島大学病院や徳島市民病院は急性期を対象とする公的な医療機関だが、その後、慢性期、療養型を中心とする民間の医療機関にもマスキングテープアートを導入する機会を得た。

医療法人修誠会(板野郡北島町)の介護老人保健施設「敬愛の家」では、私たちの制作に先立って、マスキングテープ製造会社であるカモ井加工紙株式会社が2019年8月に「mtワークショップ」を開催した。50名ほどの入所者やデイサービスの利用者が集まり、あらかじめ用意してあった下絵やオブジェに自由にマスキングテープを貼って思い思いの作品を制作した。この時には缺は使用せず、手でちぎって貼る作業に限定された。マスキングテープを初めて扱う人も多かったと思われ、当初は戸惑いも見られたが、見よう見まねで作業を進めていくうちに慣れていき、きわめて熱心に集中力を持って作品を仕上げていった。通常のレクレーションでは、興味を示されない方やすぐに飽きてしまう方もおられるとのことだったが、この時は皆無で、全員が実楽しそうだった。貼り方や色使いにも個性が表れ、同じ下絵でも全く異なる仕上がりになったのが興味深かった。中には自力では

テープをちぎることができない人もおり、職員がちぎったものを渡して貼るといった光景が見られたが、その過程で会話も生まれ、コミュニケーションにも役立っているようだった(図4)。



図4 介護老人保健施設「敬愛の家」でのmtワークショップ

このワークショップを機に同施設でのマスキングテープへの認知が高まり、積極的な使用が開始された。普段からちぎり絵や折り紙などを数多く制作していたため、まずはそれらの代わりにテープを使うことから始まった。12月になって、クリスマス会の舞台背景として壁画を装飾してほしいという依頼があり、今度は私たちがクリスマス装飾を制作した。この時に数名の職員が制作の様子を見学していたが、実際にクリスマス会に行ってみると、我々の作品に装飾が追加されていた。年が明けてクリスマス装飾を正月飾りにリメイクしに行ったが、この時は数名の入所者の方や職員も一緒に作業に加わった(図5)⁴⁾。こうして壁に直接貼ることを会得した同施設では、その後は季節に応じた装飾を自ら積極的に制作するようになった。我々以上に洗練されたモチーフの作り方に驚かされることもあるほどだ。



図5 クリスマス装飾のリメイク(敬愛の家)

同施設に併設する吉野川病院でも、入院患者さんのレクリエーションの一環としてマスキングテープアートを試みるようになった。老健施設よりも病状の重い方が多く、ほぼ全員が車椅子ということで、ここでは新たな方法を導入した。まずはテーブルの上でテープをちぎって貼るだけ、というシンプルな作業から始めることにした。25cm四方のフィルムシートを用意し、一人1枚ずつ配ってテーブルに仮止めした。その後、ピンク色系のテープを数種類ずつ渡し、テープをちぎってフィルムの上に貼る

やり方を見せ、フィルムを埋め尽くすまで貼ってもらった(図6)。仕上がったものを回収し、あらかじめ壁に直接作っておいた幹の上にフィルムをこちらで組み合わせて貼り、桜の大木に仕立て上げた(図7)。当初は最終形を提示していなかったため、患者さんたちから感嘆の声が上がった。



図6 吉野川病院でのワークショップ。フィルムシート上の作業。



図7 フィルムシートを組み合わせて作った桜の大木
(吉野川病院)

直接壁に貼る作業が難しい患者さんには、安全なテーブルの上での作業が望ましい。かといって個別に作品を作るだけではその場限りの作業で終わってしまう。ここで試みたように、個々の作業を組み合わせて大作品を構成するという方法は、個別の作業だけでは得られない満足感、達成感を生み、院内でも目を引く装飾になるという大きなメリットがある。この方法はマスキングテープアートのみならず、他の制作にも広く応用可能なものとして提案したい。

5月頃には同院の職員の主導で同じ方法が試みられ、桜が新緑の装飾に変更されていた。今後は同院で注力し始めた回復期リハビリにマスキングテープアートを応用する方法を模索していきたいと考えている。

4. 小松島病院での制作

2020年の3月頃には別の民間病院でも制作を行う話がまとまった。徳島市の南、小松島市にある医療法人道志社小松島病院である。内科と整形外科を擁し、リハビリテーションに力を入れている同院で、訓練室前の廊下の壁面装飾を行うことになった。これまで長い廊下の装飾は経験がなかったが、この廊下が歩行訓練等にも積極的に使われているという話を聞き、少しでも訓練のモチベーションが高まればとの思いで、自然をベースに連続性のあるデザインを考えた⁵⁾。元々は額装された絵などが飾られていたことも鑑み、額をイメージした長方形の枠内に、マスキングテープで季節毎の図柄を4点制作することにした[TANAKA, NAGAIRO, BANDO, 2020-2]。

ちょうど徳島県でもCOVID-19の影響が出始めた時期と制作が重なったこともあり、制作中のソーシャルディスタンスを保持することと、全体のイメージを早い段階で見せるという目的もあり、一人が一季節を担当し、四季の制作を同時並行で進めた(図8)。感染拡大による活動中断もあったため、今回は可能な限り早く仕上げることを重視して、これまでに経験のあるモチーフを中心に、種類を少なくして一つ一つを大きく作ることを心掛けた。2020年8月上旬に再び活動禁止期間に入る直前に、枠内だけは何とか仕上げる事ができた。総制作時間は20～25時間ほどである。制作中は訓練中の患者さんが幾度となく通行され、「きれいにしとるなー」、「器用やなー」と何度も声をかけられた。「あの看板のところまで歩いてみましょうか」というリハスタッフの掛け声が、「今日はあの銀杏の木のところまで」「今度は桜の木まで」などのように変わっていくことを期待している。



図8 小松島病院での制作の様子

ところで上述の徳島市民病院でもそうであったように、全体像のイメージを早い段階で示すことは、特に初めてこの種のアートを採り入れる場所においてきわめて有効である。ホスピタルアートというものが想像できない人や事情を知らない人には、外部からやってきたグループが突然施設に手を加え始めることは不審な行為に映るかもしれない。これまでと異なる環境が出現することに多くの人は不安を抱くのではないか。その不安を早期に期待へと転換してもらうためには、出来上がるものの姿を早期に把握して安心感を持ってもらい、制作過程の進行を楽しみにしてもらえるように努める必要がある。モチーフを輪郭にあたる外側から作り始めたり各モチーフの例を先に一つずつ作るといった経験者と初心者の協働の工夫が、ここでもまた生かされることになった。

5.「マステアートが変えるところとからだ」ワークショップ

時期は前後するが、2月に大学で「マステアートが変えるところとからだ」と題したマスキングテープアートのワークショップを開催した。目的は県内の医療・福祉の現場の職員や学校などで、ホスピタルアートの導入に関心を持つ人を増やし、手軽にできるマスキングテープを用いた制作を一つの手段として提案することにあった。当日はほぼこちらの期待通りに、医療従事者(看護師、介護士、理学療法士、作業療法士)、教育関係者(幼稚園、障がい児施設、高校)、障がい者と家族、高校生、アート関係者と、延べ40名ほどの異なる職種からの参加者が集まった。

ワークショップでは、ホスピタルアートの現状や我々の活動の紹介を軸としたミニ講義を15分ほど行った後、あらかじめ異なる立場の人が一緒になるように分けておいたグループでの制作練習を行った。4~5人ずつのグループごとに筆者または学生が1人ずつ付き、まずは互いの自己紹介と、マスキングテープの使い方を説明し、テーブルの上でモチーフ制作の練習を行った。その後、全員で大画面の壁画の制作を行った。今回のテーマは「春の渦びらき」と「お手洗いサイン」であり、2グループが桜を、別の2グループが渦を、残りの1グループがサインを担当した。

我々の方では各モチーフの位置の目安を壁につけ、一応のモチーフの作り方の例を示しておいたが、参加者たちはテープの使い方を習熟すると、こちらが全く思いもつかなかったような色柄を使ったり、組み合わせ方や形を工夫したりし始め、アイデアの多様さに驚かされた。それが特に顕著に表れたのが渦のモチーフである。一つとして同じ渦はなく、各々は典型的な渦の形や色でなくとも、全体として迫力のある渦の集合が出来上がった(図9)。



図9 「マステアートが変えるところとからだ」ワークショップの様子(徳島大学フューチャーセンター)

トイレのサインにしても、赤、青という典型的な色を区別して使うことしか想定しておらず、青色の部分に赤系統の色が混ざられた時などはやや心配だったが、それでも全く違和感のない仕上がりになった。

ワークショップ終了後には何人もの方が、充実感、達成感、解放感などを直接筆者に伝えに来られ、熱い言葉をたくさん頂いて、こちらも開催した甲斐があったと感じた。終了後の匿名アンケートからも、ほぼ全員が大きな満足感を得たことが読み取れた。自由記述欄に「これが正しく、これが間違いというのがないのが良い」という意見がありハッとさせられた。上述したような、意外な組み合わせや形でもそれなりの作品が出来上がるというのは、実はマスキングテープによる壁画ならではの特徴なのかもしれない。

このワークショップの後、参加者の中には早速マスキングテープアートを実践する人が複数現れた。実際に職場の医療機関で制作し、季節ごとにリメイクして写真を送ってきて下さる方々、外出自粛を機に開催されたオンライン講座で、自らマスキングテープアート制作を教えられた方など。マスキングテープを用いたホスピタルアートの県内への普及というこちらが意図した通りの状況が生まれ始めている。

さらに別の同業者にワークショップの内容を紹介された参加者もいた。その関係で新たな施設から協力要請があった。

6. アクティブキッズすみよし

それは児童発達支援・放課後等デイサービスの事業所である「アクティブキッズすみよし」(徳島市)である。開設間もない施設で、子どもたちの活動の一環としてマスキングテープアートを取り入れられないかという相談だった。

我々には未だ子どもと協働した経験がなく、障がいのある子どもたちということもあり、これまで通りのやり方が通用するかどうか確信が持てなかった。同施設の先生方と話し合い、まずはわたしたちの作例を設置しておいて子どもたちに興味を持たせた上で、実際に作業の導入を検討することになった。

6月に初めて子どもたちとのワークショップを実施することになった。初めての作業への取り組みや集中力を心配された先生方の提案により、なるべく慣れた作業と関連付ける方が良いとのことで、あらかじめ画用紙の上に下絵を描いておき、それに塗り絵のような感覚で自由にマスキングテープを貼っていく方法を採用することになった。ただ、それだけで終わっては達成感に欠けるのではないかと考え、仕上がった絵を輪郭線で切り取り、壁に貼り付けることで大きな壁画にする方法をこちらから提案した。切り取りが難しい場合はこちらで補助することを申し出た。この二段階で行う案が了承され、壁画のテーマを海に定め、画用紙には魚、船、イルカ、ヒトデ、貝殻の下絵を用意した。

ワークショップ当日、まずは予定通り、子どもたちに好きな下絵を選んでもらい、数十種類のマスキングテープを自由に使って貼ってもらった。貼り方は個々で見事に異なっていた。細かくちぎったものを丁寧に貼り合わせていくパターン、周辺部を貼ってしまってから内側へと進んでいくパターン、テープを長く切って大まかに絵を埋めてしまってから細部に取り掛かるパターン、まだらに貼って余白を残すパターンなど、こちらが貼り方を提示したわけでもないのに、子どもたちは自ら考え、集中して作業に取り組んでいた。仕上がった絵を切り取る段階でも、子どもたち自ら鋏を上手に持って切り抜いた。切り抜かれたモチーフは、裏側1～2か所に両面テープをつけ、壁との接触面にマスキングテープを貼った上で壁に貼り付けていった。この作業は我々の方で行っていたが、途中からは自分で貼りたいという子どもが現れ、他の子どもの分も積極的に貼っていった。モチーフの合間には、渦やわかめなど海をイメージできるような小さなモチーフを我々の方で壁に直接作っていった。すると、自分の作業が終わった子どもたちがテープを持ってきて、自ら壁に貼りだした。必ずしも海とは関係のないモチーフも多かったが、一人が貼り始めると真似をする子どもが一人、二人と現れ、次々と画用紙の作業から離れていった(図10)。子どもたちが直接壁にマスキングテープでモチーフを作る

のは難しいと考えていた施設の先生方は、この子どもたちの順応性の速さと積極性に驚かれ、次回からは直接壁に制作できるとの確信を持たれていた。ここでもやはり、制作作業を見せたことが功を奏したのかもしれない。



図10 「アクティブキッズすみよし」でのワークショップ

7. おわりに

以上のように、医療機関の現場や大学で行った複数のワークショップをきっかけとして、徳島の医療機関や福祉施設にマスキングテープアートの導入が広がりつつある。これまでも述べてきたように、衛生的で安価で貼り直しができることが特徴のマスキングテープは、ホスピタルアートに適した素材である。だがそのことを紹介し理解してもらっただけでは、従来の折り紙やちぎり絵などに替えて使ってみようという気持ちにはつながりにくい。多忙な現場では、新しい試みに踏み出すための想像力を膨らます余裕を見出すことが難しいのだろう。導入には確実性も求められる。そのため実際に制作してみせることでイメージを持ってもらい、自ら体験することで確実性を実感してもらうことが有用だといえる。制作イメージを示す際には、早く全体像を想像してもらえそうな配慮をした作り方が効果的である。

ワークショップへの参加者の大部分は、これほど気軽に楽しく、そしてどこにでもマスキングテープアートを施すことができることに感激し、積極的に制作していくようになる。この好循環のスパイラルを多くの現場に生んでいくことが我々の役割の一つである。大学でのワークショップ参加者を中心に、「とくしまホスピタルアートリンク」というネットワークを構築し、それぞれの取り組みの情報交換を行う場を設けた。今後はこのメンバーがまた別の場所に好循環の種を蒔いていき、ネットワークがさらに広がっていくことを期待している。

図1～図10の写真は全て筆者撮影によるものである。掲載については各機関より許可を得ている。

注

- 1)この間の活動については次のサイトを参照。
Tokudai Hospital Art Labo-THAL <https://www.facebook.com/tokudaithal/>
- 2)病院内のアートは患者のみならず職員にも好影響を与えられている。
Scher & Senior, 2000.
- 3)この点については2019年の本学会で発表を行った。川端 ひな・田中 佳「マスキングテープによる階段アート制作の効用—徳島の病院の事例から—」(ポスター発表)、アートミーツケア学会 2019年大会、近畿大学;田中 佳・川端 ひな「マスキングテープを用いたホスピタルアートの可能性」(口頭発表)、同上。
- 4)この時の様子はカモ井加工紙工業が取材し、インタビューと共にwebサイトに公開されている。
<https://www.masking-tape.jp/mt-lifeart/>
- 5)自然の風景は病院で好まれるイメージという認識が定着している。
Ulrich, Lunden, Eltinge, 1993 ; Lankston et al., 2010.

参考文献

- Lankston L., et al.,2010, “Visual art in hospitals: case studies and review of the evidence.” *Journal of the Royal Society of Medicine*, Royal Society of Medicine, London, 103(12), pp.490-499.
- Scher P., & Senior P., 2000, “Research and evaluation of the exeter health care arts project”, *Medical humanities*, Institute of Medical Ethics, Cleveland, 26(2), pp.71-78, 2000.
- 田中佳, 2020, 「[実践報告]健康と癒しの両立を目指して—徳島大学病院におけるマスキングテープアートの試み(2018年度)—」『アートミーツケア』(オンラインジャーナル), 奈良, アートミーツケア学会, Vol.11, pp.55-66.
- Tanaka K., Nagahiro S., Bando H., 2020-1, “Beneficial Art in Hospitals with Masking Tape Initiated from University Hospital”, *Journal of Biomedical and Clinical Case Reports*, London, Asploro, 3(3), pp.202-206.
- Tanaka K, Nagahiro S., Bando H., 2020-2, “Psychologically comfortable seasonal images for the project on the art in hospitals”, *Arts & Humanities Open Access Journal*, Edmond, Med-Crave, 4(5), pp.187-189.
- Ulrich R.S., Lunden O., Eltinge J.L.,1993, “Effects of exposure to nature and abstract pictures on patients recovering from heart surgery”, *Psychophysiology*, Hoboken, Society for Psychophysiological Research, S1:7.